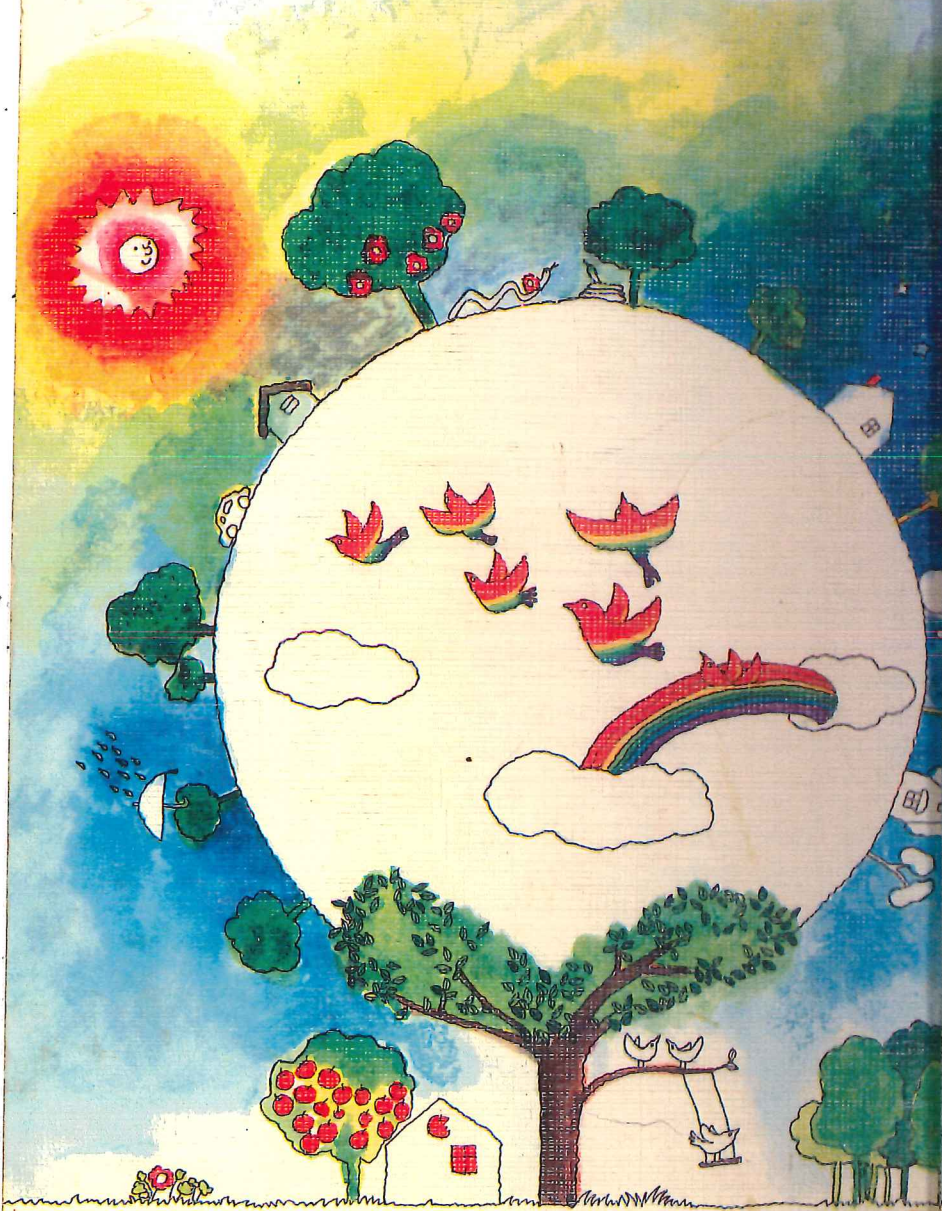
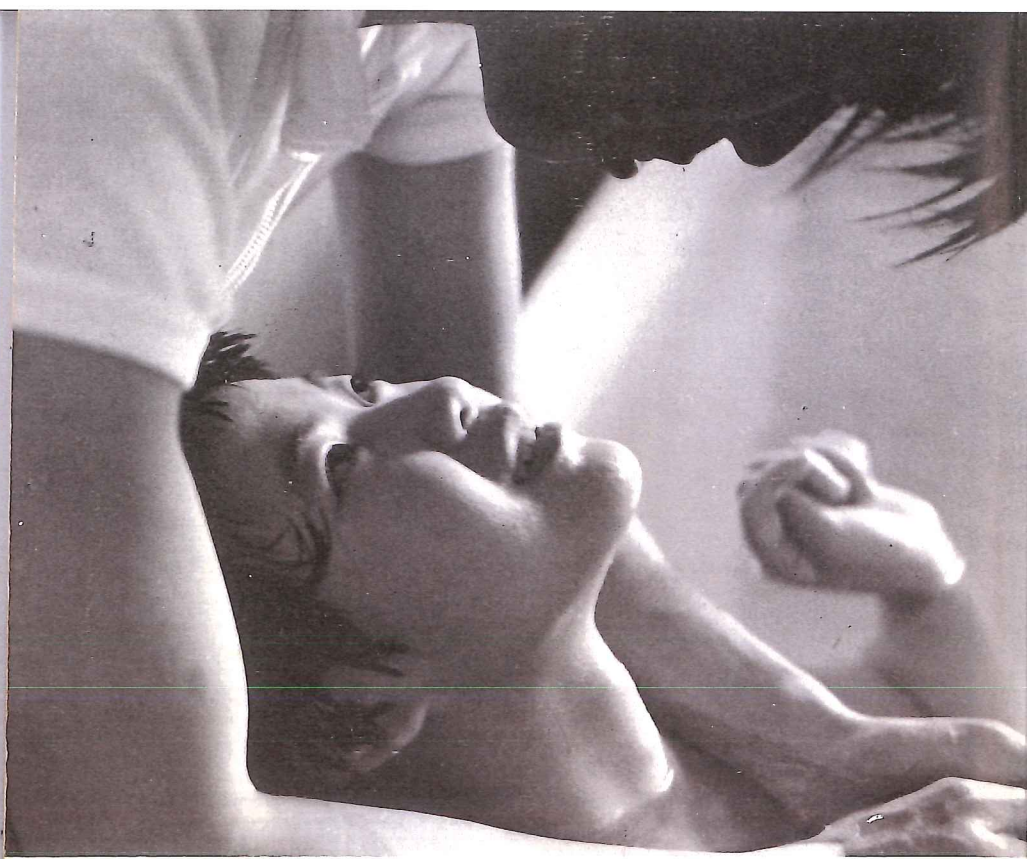


親と子のための福祉教育読本

ふくしのこころ





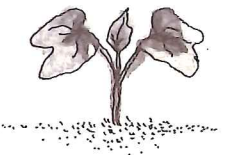
写真・畑山豊美

もくじ

1. 勇君にまけたらはずかしい…………… 2
 2. 家庭奉仕員となって…………… 8
 3. いやなこと…………… 15
 4. オメデタイ、オメデタイ人間…………… 20
 5. がんばっているのに…………… 27
 6. このごろ思うこと…………… 33
 7. あるできごと…………… 40
 8. おどろきました…………… 47
 9. ひろしのこと…………… 51
 10. 若いお母さんとおじいさん…………… 58
 11. やっぱり勇気がある…………… 62
 12. うわべだけ美しくても…………… 66
 13. バトンタッチ…………… 71
 14. 点訳をはじめて…………… 75
 15. 姑とわたし…………… 80
 16. 里子…………… 85
 17. ゴミひろい…………… 91
- おわりに——この本のつかい方など…98



ふくしのころ



一 勇君にまけたらはずかしい

勇君は、小さい時、小児マヒになったので、手足がふじゆうです。三年生ですが、わるいお友だちが、

「びつこのくるくるぱあ。」

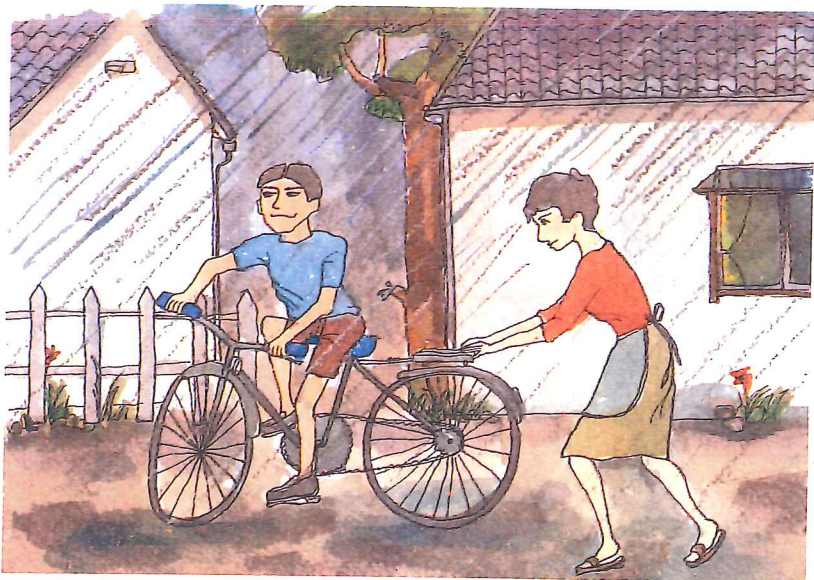
と、わる口を言うほど、左手と、左足が右よりも細いのです。

そんないさむちゃん、自転車のけいこを始めたとき、

「へー。」

と、みんながおどろきました。

私だって、「ほんとにのれるように、なれるのだろうか。」と、心の中で、くびをかしたほどです。



ほじよ車のついた自転車からけいこをはじめました。ペダルも、上手にふめないので、だれかがうしろからおさえなければ、ちつとも前にすすみません。

ハンドルも、右や左にぐらぐらしました。車のおらない、私の家の前の道路を、勇君のお母さんに、自転車のうしろをおしてもらって、毎日、れんしゆうです。

少しぐらい雨がふっても、ころんでも、自転車のけいこを休みませんでした。

広場の近くの道に、水をながすために、ほったみぞに、車のはまって、どぶに、

落ちたこともあります。

自転車がたおれた時、石に頭をぶつけて、びよういんで、三針みはりぬったこともありまして。

こうして、いさむ君は、ふつうの人の何倍もどりよくして、やっと自転車にのれるようになったけど、まだ、一人でのったりおりたりできません。

手足がわるいので、かた手、かた足でのるのと同じなのです。

なんどもなんども

ころびました。

私たちが走って
いて、起こしてあげ
ようとしたら、

「一人で起きなさい。」



手足がふじゆうだといって、人にあまえていたら、社会にでたときこまるのよ。」
と、お母さんがいいました。そして私たちに、

「同情どうじょうは、勇のしょうらいのためにならないから、だまって見ていてちょうだいね。」

そして、勇君が泣きそうになると、

「がんばりなさいよ。できないと思つてやらなかったら、いつまでもできませんよ。」
と、はげました。

勇君の顔は、あせと、どろでよごれ、手足には血がにじんでいました。

広場のみんなが集つてきて、勇ちゃんがころんでもけがをしないように、だ
まつて石ころをひろつて、広場のすみにすてました。

私は、上手にのれるように、心の中でかみさまにいのりました。

勇君は、いきおいをつけて、サツと足をあげました。

のれたのです。

一人で、のれたのです。

「いさむちゃん、がんばったね。」

お母さんも、いっしょに走りながら、ぼろぼろなみだをながしました。

私たちも、しんとなつて、なみだをふきました。私は、おちたむぎわらぼうしをひろつて、かぶせてあげました。

みんなは、

「勇ちゃん、ばんざい。」

と、さけびました。

こうして、歩くことさえふじゆうな勇君が、一人で、自転車に、上手にのれるようになったのです。

人のなんばいもくろうして、自転車のりをおぼえた勇君に、「びっこ」なん

てわらう人は、一人もいません。

自転車のりでできたえたこんじょうで、勉強と手足のくんれんにがんばっています。私よりも、手足のふじゆうないさむ君のほうが、しんけん^{しんけん}に努力しています。私は、そんな勇君を見ていると、いつも、「負けてはいられないぞ。」とがんばるのです。

△話合いのてびき▽

ころんだいさむ君を助けおこそうとして走りよったとき、いさむ君のお母さんは、ことわりました。どうしてでしょうか。

もし、練習のときではなくて、手や足の不自由な人や、お年寄り^{としよ}が、たおれたりしたときは、皆さんはどうしますか。

いさむ君が、自分で自転車にのれるようになったとき、思わずみんなが、「ばんざい」といいましたね。あなたはどんな気持がしましたか。また、そのまえにみんなで、石ころをひろいましたね。そのときの、みんなの気持は、どんなことで一つになっていたのでしょうか。

二 家庭奉仕員となつて

家庭奉仕員になつてはじめての仕事ですごく不安でした。住民課の係長さんが、「となりの町に、一足先きに奉仕員さんがいらっしやるから、一度お伺いして仕事の内容を見せてもらったら。」

と、親切に手配してくださいました。その時、暖かく迎えて下さったのが奉仕員のSさんでした。そして、Sさんの訪問先に案内していただいて、仕事の内容をみせていただきました。

住居の掃除、食事の世話、指圧など、その時のおとしよりの笑顔が今だに忘れられません。



とその苦しみを忘れてしまつたわ。がんばつてやりなさいね。」
と、はげまして下さいました。

そのあくる日から、訪問をはじめました。雨の日、嵐の日、雪の日、かんかん照りの日も、自転車です……。

「おばあちゃん、こんにちは。」
重たい戸が、いつも締まっている。その戸をあけると、お元気でいらっしやるかしら……と思ひながら、声をかけて中へ入る。

「よう来ておくれた。あんたが頼りやで

なあ。」

と声がかえってくる。

「おばあちゃん、きのうは大雨で、困^{こま}ってやったでしょうね。」

あちこちに、洗面器^{せんめんき}がうけてある。

「困^{こま}ったで、雨もりがひどくて。」

「おばあちゃん、布団^{ふとん}がぬれているよ。こんなところで寝^ねていたら、風邪^{かぜ}を引いてしまうよ。はよう起きて。」

「そうかな、ぬれとるかな。」

「おばあちゃん、着物^{きもの}も、じとつとしてているよ。はよう着^きがえないと。」

「わしゃもう、もうろくしてしもうとるなあ。」

善意銀行^{ぜんいぎんこう}からいただいた布団^{ふとん}や着物^{きもの}と交換^{こうかん}する。着物^{きもの}は、着丈^{きたけ}に縫^ぬいあげをして着^きせてあげる。

「あんたならこそなあ。」

といて喜ばれる。

「おばあちゃん、こんな床^{ゆか}のブカブカしたところに寝^ねないで、この間^ま造作^{ぞうさく}された部屋^{へや}で休^{やす}まれたら安心^{あんしん}でいいよ。」

「あの部屋^{へや}は、電氣^{でんき}がつかないので、よう寝^ねんのやなあ。」

と、おっしゃる。係長^{けいちょう}さんに事情^{じじょう}を話^わして、電氣屋^{でんきや}さんに工事^{こうじ}をしていただく。「おばあちゃん、この電氣^{でんき}つける時^{とき}、このひもを引^ひっぱって、消^けしたり、つけたりしなさいね。」





「明るい電気やなあ。わしやあ、はじめ
てやあ。」

「といって長いひもを、不思議そうに引っ
ぱってみられる。」

「おばあちゃんの手足は汚れ、爪は伸び
ている。いつも薪まきで、ごはんを炊き、か
まどの前にすわって、手足をあぶって暖あたた
められるから、つい黒くなってしまいの
です。」

「おばあちゃん、手足をきれいに洗おうね。」

「わが子でもしてくれないのに、こんな
ことまでしてもらって、もったいないな

あ。あんたのご恩は、一生忘れしまへんで。
と、おっしやる。

「おばあちゃん、爪も短く切ろうね。」

「もう九十一にもなったたら、爪を切る力もなくなってしもうて。」

「おばあちゃん、髪かみもきれいにしようね。」

「すき櫛くしで、すいておくれるか。」

すき毛かみに、ゴミがたくさんくつつく。

「おばあちゃん、髪を短く切ってないか。」

「わしや、あんなハイカラな頭はきらいでなあ。」

「でも、おばあちゃん、短い方が、始末しまつするのが、簡単かんたんでいいですよ。」

「そうやなあ、またそのうちに考えとくでなあ。切るときにはあんたに頼たのむわ
なあ。」やがて髪もすき終しまって、

「おばあちゃん、気持よくなったでしょう。」
「本当に、いい気持やった。すまんことでしたなあ。」わたしも、おの自ずと笑顔になつてくるのでした。

△話し合いのてびき▽

家庭奉仕員は、べつめい別名、ホームヘルパーともいいます。もし、この人たちがいなかったら、ひとりきりで、体が動かないおじいさんやおばあさんは、どうなるでしょう。

ヘルパーさんが来ない日や、夜になって急病まうびょうになったり、火事になつたりしたら、どうなるでしょうか。

この、おばあちゃんの家族はどうしているのでしょうか。遠くにいるのかもしれないね。あなたの近くに、そのようなおとしよりがいたらどうしますか。

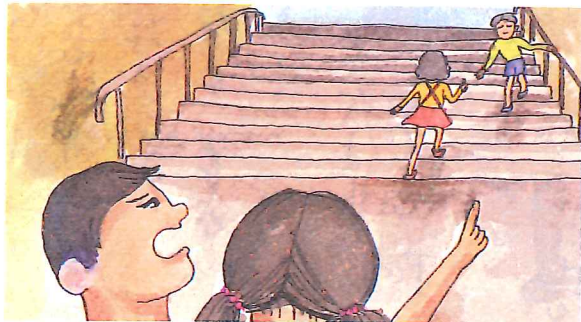
三 いやなこと

きのう、ぼくと、となりのおねえちゃんが、おくじょうで、かいだんのぼりをして、あそんでいると、六かいのりゅうくんたちがやってきて、

「あほがおった。」とか、「めくらがおった。」
といました。

ぼくは、また、いやなりゅうくんに、あつてしもたとおもいました。りゅうくんは、いつでも、こんなことをいっていじめるんです。

ぼくは、このマンションにひっこしして、そんなな



あ、まえのいえだと、だれもいじめられなくて、あそべたのにとおもいます。

このまえも、ぼくが、おくじょうで、ひとりであそんでいると、りゅうくんが友だちや、りゅうくんのおねえさんといっしょにきました。そうして、

「この子、あほかもしれへんから、一、二の三で、たたいたるか。ええなあ。」
「一、二の三。」

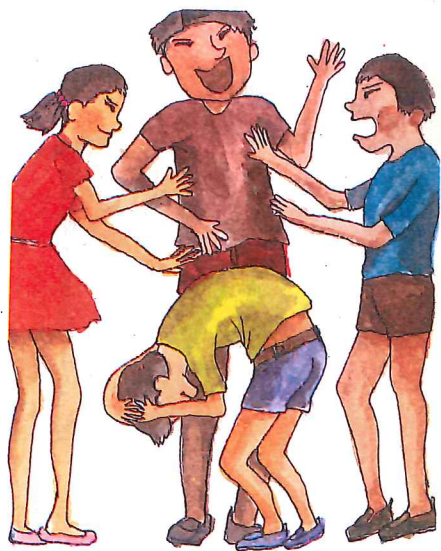
と、ごうれいをかけて、ぼくのあたまを、三人いっしょに、たたきました。

ぼくは、頭をたたかれるより、せなかのほうが、まだましやと思って、下をむきました。三人は、たたいてばかりいました。

ぼくが、目が見えたら、りゅうくんなんか、かいだんからつきおとしてやるのになあ、と思いました。弟にいいつけて、やつつけてもらおうかと思いました。ぼくが、その子のうちを知っていたら、おばさんに、どなりに行つてやるのにと、くやしくてたまりません。

ぼくの頭ばかりたたくと、さんすうのけいさんが、わかりにくくなってしまいます。ぼくは、なみだをながしたけど、声をださずに、がんばりました。

いくら、見えなくても、ぼくは、あほじゃありません。さんすうもできるし、おんがくも、おことも、こくごも、りか



も、しゃかいも、ずこうも、なんだってできます。りゅうくんたち、ぼくが、学校へいつていることも知らないで、「あほ」「めくら」ばかり、いうんです。

ほんとうは、そんなことをいう、りゅうくんのほうが、ばかだと思います。

二、三日まえ、ぼくと、となりのおねえちゃんと、ふたりであそんでいると、りゅうくんがきて、

「また、このあほがおった。」
といました。

そして、おかあさんが、たねをまいた
コスモスの花をちぎりはじめました。

せっかく、きれいにさいていたのに。

りゅうくんたら、花をちぎることと、人
をばかにすることだけしか、しらない
子です。りゅうくんがいたら、チューリ
ップも、きんせんかも、スイトピーも、
やぐるまぎくも、きんぎょそうも、きれ
いな花なんて、つくるのはなかなかだめ
です。それは、りゅうくんがきて、すぐ



ちぎってしまっからです。かわいがる気もちなんて、ないんです。コスモスは、
もう、みんなわやくちやになってしまいました。
りゅうくんが、人をばかにしたり、いじめたりしない、いい子に、早くなっ
てくれないかなあ。

△話し合いのてびき▽

目をしばらくつぶってみましょう。その間、あなたは、目を開い
ている人よりも、劣った人間だ、といえるでしょうか。そんなこと
はありませんね。

この作文の、目の見えない子の場合でも同じことですね。

それどころか、花をだいにするやさしい気持や、いじめっこの
りゅう君が、いい子になってほしいと願っているやさしさは、目の
みえるりゅう君以上に、りっぱですね。

それなのに、どうして、りゅう君たちは、きたないことばや、暴
力をつかっていじめるのでしょうか。あなたはどうか。

四 オメデタイ、オメデタイ人間

「園長、こっちへ来い園長」職員や子供達が大声でよんだ。

止揚学園に来ていた見学者が、(園長をよびつけにして、乱暴な礼儀のない人達だなあ。それにしても、あの職員や子供達の態度を見ると、よほどこの福井という人は、皆から嫌われ、信頼がないんだなあ) というような顔をした。

「園長、早うここへ来い。」

また、皆がよぶ。見学者は、あきれかえった顔をして、私をジッと見つめる。あわてた私は、どもりどもり、

「アノ、アノ、ジ、実は、この学園には、園長・副園長という名の、二匹の犬がいるんです。」

「へー、園長って、犬の名ですか。あなたがよばれているのかと、びっくりしました。」

見学者は、急にゲラゲラ笑い出した。

さて、副園長という犬は、園長の息子で、ポインターのかかった雑種である。獵犬本能があるのか、動くものには何でも跳びつき、田んぼの蛙、野兔を喰わえて走りまわり、余りいたずらをするので、保健所につれて行こうということになった。

「僕は、かなわんど、誰か行けよ。」



私は、この悪役から逃げ出す先手をうった。

「私達だって、いやですよ。」

職員たちも、くちぐちに言っただけだす。

「鬼の福井って、先生のことでしょう。こんな時、鬼になって捨ててきて下さいよ。」

「アホ言いなあ。鬼と言われても、心にあつい涙がたまっているんや。」

「鬼の目にも涙ですか。」
結局、私がこの鬼役が適役ということになり、子供達に知られないように、副園長を保健所につれて行った。

その夕方、犬の世話係のむつ代さんがやってきた。むつ代さんは、精神年令が三才位の、十八才になる女の子である。

「センセ、フクエンチョウ、イナイ。」

どうしても本当のことが言えなかった。

「すぐ、帰ってくるよ。」

「ホンマカ。」

「ほんまや、心配せんでもいいよ。」

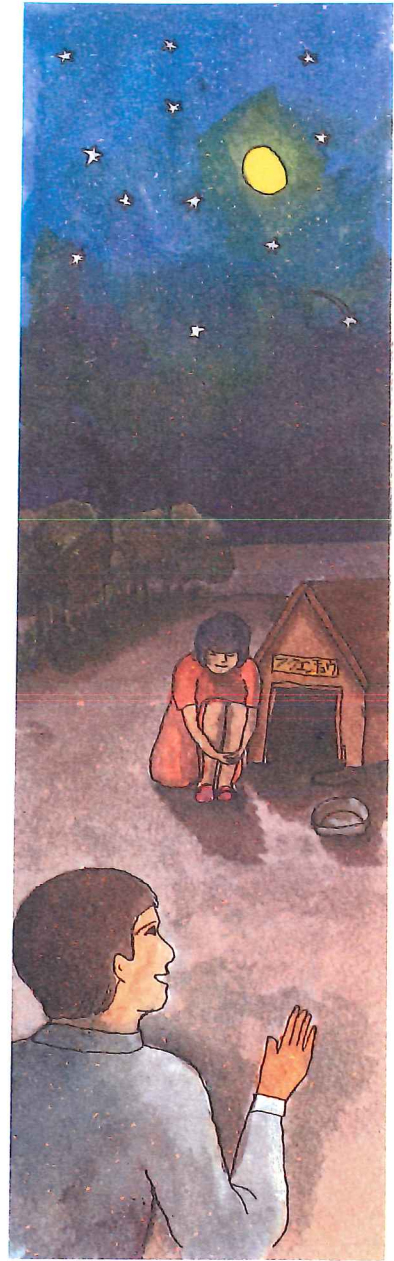
むつ代さんは、心配そうな顔をして帰っていった。

夜の十時頃、学園の見廻りに行った。運動場の片隅にある犬小屋の前に、誰かがうずくまっているのが月明りの中で目についた。私は、びっくりし、「誰や、そんなとこにいるのは。」

と大声を出したが、返事がない。

おそる、おそる犬小屋に近づくと、のっそり立ち上ったのは、むつ代さんであつた。

「何してるんや、こんな夜おそく。」



「センセ、フクエンチヨ、イナイ。」

私は、ハツとして黙だまってしまった。

「ワタシ、マッテル、帰かえッテクルマデ、マッテル。」

むつ代さんは、また、副園長のいない犬小屋の前に、うずくまってしまった。

後は、なんと言おうと、むつ代さんは、そこを立とうとしない。たまたまなくなって

「アンナ、副園長は、あんまり悪いことするから、保健所につれて行ったんや。だからなあ、もう帰かえってきよらへんね。」

「センセ、帰かえッテクル、言ウタ。」

その夜、むつ代さんと私は、犬小屋の前で徹夜とつやになってしまった。むつ代さんの側そばに坐すわりながら、空に浮うんでいる月のようにキラキラと光あっている、豊かな、むつ代さんの心を感じ、私は楽しかった。

(誰たれが、この重い知恵ちえおくれの子供達を、アホ、役に立たない、生きていても仕方しかたのない存在そんざいだと言いえるのであろうか、こんなに目に見えないものの中に、素晴らしいものを持つている子供達が、人間にんげんでなくてなんだろう。私達は、目に見えるものだけ大切にたいせにして、人間にんげんとして一番大切なものを、忘れてるんや。

この子供達の方が、ずっと人間らしい心を持ち、人間として生きてるんや…)

私は、何か心が、すみずみまで洗あわれていく思いであった。

細い光の糸が東空に見え、夜があけても、むつ代さんは、そこを立たなかった。その日、私は保健所に行き、理由を言って副園長をつれて帰ってきた。その時の、むつ代さんの素晴らしい顔が、今もはっきりと私の心に残っている。

△話し合いのてびき▽

世間では、「バカ」とか「アホ」とか言われている「ちえおくれ」のむつ代さんが、犬をだいにする心を、だれよりも強くもっていたことがわかりましたか。

副園長という名の犬が、保健所から「帰ってくるよ」と言われて、夜になってもまちつづけたのはなぜでしょうか。

人を信ずることが、このようにじゅんすいの心のむつ代さんにはできるのに、どうして、わたしたちは、人を疑ったり、ウソを言い合ったりするのでしょうか。

五 がんばっているのに

誰かが

お前なんか目ざわりだと言った

こんなに努力して生きているのに

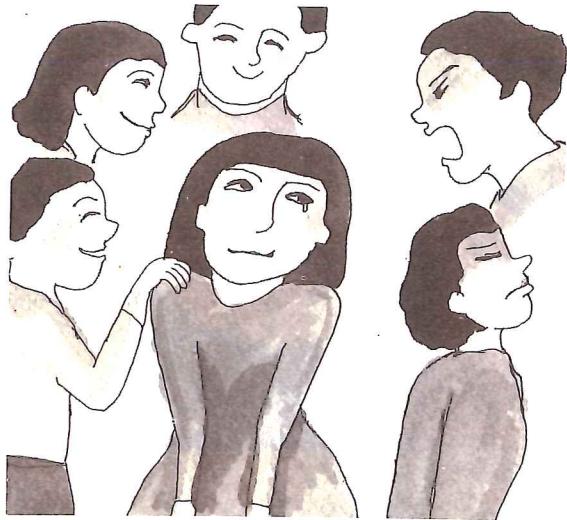
こんなにえんりよして生きているのに

誰かが

お前なんか死んでしまえと言った

どんなに苦しくても生きているのに

どんなにつらくても生きているのに



誰かが

お前なんかじゃまだと言った

みんなに愛されて生きて来たのに

友達からも愛されて生きて来たのに

だから私は

神様はわたしに

こわれた足をくれました

それでも

少しでも歩ける松葉づえをくれました

それからね

元気な明るいお友だちも

たくさんくれました

それからね

それからね

悲しい時にも

うれしい時にも

花をどけてくれる

先生も与えてくれました

だから私は

しあわせをつくって行くのです



笑う夕日

はげしい夕立ゆうだちは

松葉まつばづえのわたしを待まってはくれなかった

じょうぶな足がほしい

一人で走れる足がほしい

神様かみさまわたしに足をおくれ

お買物かいものに行ってみたい

お手伝てつだいがしてみたい

一人で学校へ行ってみたい

歩けたら

歩けたら

山に行きたい

海にも行きたい

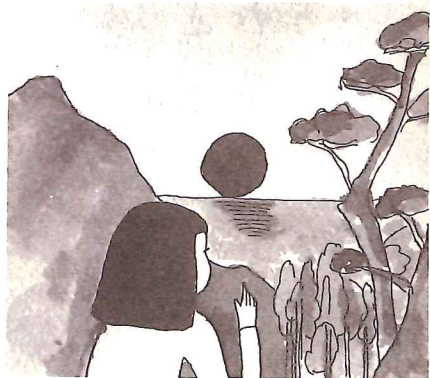
そよ風が吹ふいてきて涙なみだと雲がはれる

体がかかるくなる

夕日ゆづりがきらきら笑ってる

静しずかに目をつむっていると

わたしは松葉まつばづえがいらなくなっているような気がする



△話合いのてびき△

この詩は、足の不自由な少女が、中学三年生のときにつくった詩です。

あなたは、足首をくじいたり、折ったりしたことがあるでしょう。でも、それは、せいぜい、二、三週間でなおってしまいますね。この少女は、一生、なおらないのです。

もし、手や足をケガしたとき、この少女の詩を、おもしろく読んでみましょうね。

この少女を、めざわりだ、といった人は、どんな人でしょうね。

また、努力して生きる、ということや、えんりよして生きる、ということは、どんなことを意味しているのでしょうか。

六 このごろ思ふこと

でも、私たちが、あせに生まれて来たのでしょう。生まれるのだから、ふつうのこ井として生まれるかたのど、神様はどうしてわがいのや、私たちがこんな体にしたか、どうしてか。

今までの人生、いやなこと、楽しいこと、いろいろありますが、ありません。

おとせば、学校の行き帰り、ドロー、よいことと悪いことの見当が、きい、そ、う、な、子、が、石、を、な、げ、たり、か、げ、口、を、き、こ、う、ま、い、ま、し、た、ふ、り、返、ら、て、見、る、と、ま、る、で、人、間、の、形、を、し、た、。

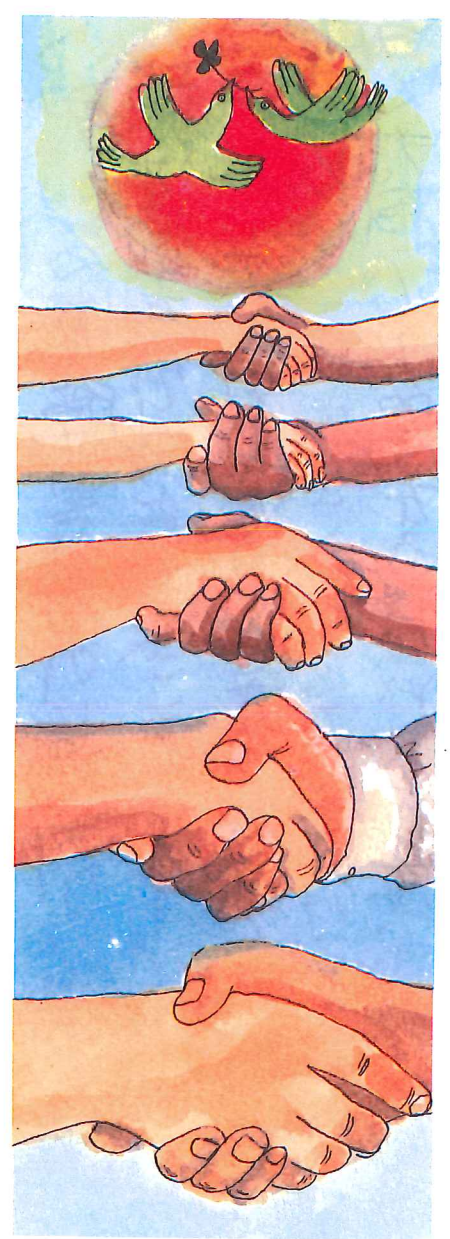


ほかの物も思っているよ。な田ノキス「アコ」
 います。でも私はこの日はオケがに反対
 には見えません。といふこと。オケがえしてカ
 ン
 私たちもあかしく思ったことは、交通
 事故なんかにあっけがたれた人には、
 やせしい手をサレーのグンあげたのには、
 私たち障害者には冷たい女がな
 気がします。
 もって生まれた障害者は、生とよってこ
 ぐら私をからかはなれません。
 生をぶけるかガリ障害といふのにお
 もとあせおう。生キって知物なナ
 リません。

私たちが障害者と一口におもってか
き分けてしまっているから生まれてくる
障害者たちは生きていることかいたにな
ないで自分自身で自分の命をた
くもまらぬもじれなうがです。
そのために 私たちが何う
もなすか 一生けん命に生きている
かき分けるならなとて思ふが
今この世の中を無差別に
思ふが。

だとして障害者差別の差別が
部落差別の差別です。
どうして差別なうが
みんな同じ人間なのとて
私たちになんの
差別がある
てしょうか。
私たちは友だちにな
りたこの
差別が
私には
差別が

私たちも多くの人をきくと話し合おう
 して少しづつでもみんなに理解して
 もらえるように力をかして行きましょう。



〈話し合いのてびき〉

この作文は、手や足の自由がほとんときかない重度（一種一級）
 の脳性マヒの高校一年のひとが、努力して、四時間もかかって書い
 たものです。

きんちようすると、手が大きくふるえるこのひとが、一字一字書
 きあげた作文を、ゆっくりと読んでみましょう。

文中にあるように、交通事故のときにケガをしたりすると、皆が
 協力して、力をかすのに、いったん、障害者になってしまったり、
 生れたときから障害児だったりすると、みんな冷たい目でみるのは、
 なぜでしょうか。

七 あるべきこと

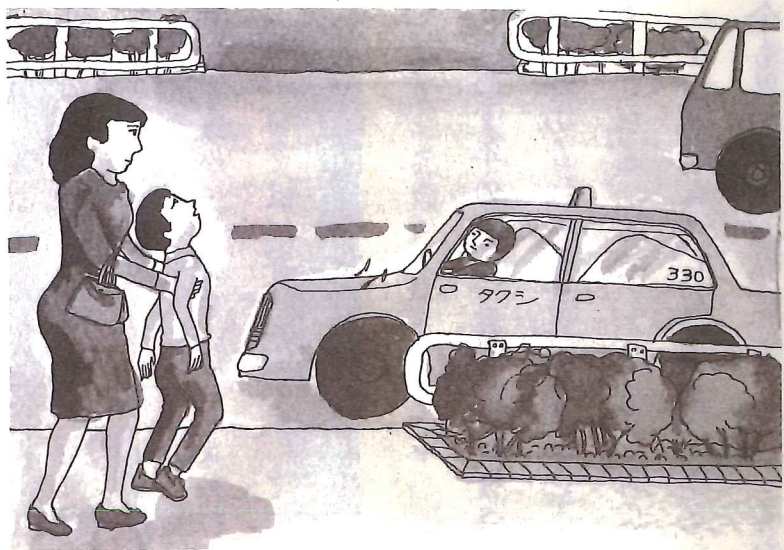
弟が東京の大学に行っていたころ、ある日、こんな話を私にしてくれたことがありました。

「それが、いつのことか、さだかにおぼえていません。

しかし、決して忘れることのできない、一つの小さな、——私にとっては、かつて出合ったことのないような大きなことだったのですが——べきことにてありました。

ある都市の、古いまちを歩いているとき、母親らしい婦人と、車をまっっているまだ、六、七才の少年にていました。

母親は、少年の左腕を肩にうけ、自分の右手を少年の腰にまわして、精一杯



支えている様子でした。

少年の方も、一点をにらむようにして、満身の力をふりしぼって立っているのです。

タイミングよく、タクシーがやってきました。

でも、それからが大変だったのです。

少年は、右半身が完全に麻痺して、左半身も、ほとんど力が入らないようでした。タクシーのドアまでの二、三メートルは、その少年をかかえきれない母親の力と、ほとんど足を前に出すことので

きない少年にとって、数百メートルよりも長く思えたことでしょう。

私は、つい思わず手をかそうと近よりはじめました。タクシーの運転手さんもどうしようかとモジモジしておられるようですが、わかっていたのですが、なぜか、突然、前をむいてしまわれました。

私が、そばに寄ったとき、その少年が私の方を見ました。

その瞬間、全身が、氷のように冷たくなったのを、今でもはっきりおぼえています。

その少年の目は、敵意というべきか、不信というべきか、少年のまわりには、蔑以外のなものも存在しないと信じきってしまったような、かつて見たこともないほど、冷たい怒りを一杯にあらわした目だったのです。

その、満ち満ちたつめたさに立ちすくみ、結局、何も手伝えなかった私が、今も思い出すたびに、なさけなくなりません。

数年たった今、あの少年は、まだ、あんな目をしているだろうか、あのとき、あの目を無視して、やさしくほほえみ、手伝ったとしたら、あの少年は、あるいは、人を信じるきっかけになったかもしれないのに、方向がちがっているとはいえ、あれほど豊かに、表情をあらわせる目を持っているならば、きっと、すばらしい絵や詩がつくれるだろうに……と思いつつながら。

しかしあのとき、あの少年に、あんな目をさせたのは、結局、自分自身だっ

たのではないか、とも思いたおすのです。

私は、あの時、単に、かわいそうにと
いう、あわれみ、だけしかなかったの
ではないかとも反省しているのです。」

それから、いろいろと二人で話し合
いました。そして結局



はれものにも触れるような、私たちの態度が、どれほど、一人の「人間」を傷つけるのかを考えねばならないと思うのです。

障害者と、対等の人間としてつきあうことは、また一方で、甘えを許すことではないと思うのです。

怒りもまた、ぶちまけあえるようになったとき、初めて、障害者という言葉もなくなるような、人間として、あたりまえのことを、あたりまえのこととしてできる、——重い荷を持っている人がいれば手伝い手伝われ、歩きにくい人がいれば

「肩につかまりなさい。」

「ああ、すまないね。」

と、素直に言える社会がくると思うのです。

弟は、また、こんなことも言っていました。

「私が、あの時あんな態度しかとれなかったことは、今、私自身が身障者になったら、まわりの人を、氷のような目で見てしまう人間になってしまふ気がする。

「おい、そんな目をするなよ、困っているときは、お互さまだろ。」といって、
「がんばれよ。」と、別れる人間になりた
いと思う。

そして、不幸な事件で、体が不自由になつて、一人で行かなければならないとき、階段などにさしかかったら、すみません、ちよつと肩をかしてもらえませんか



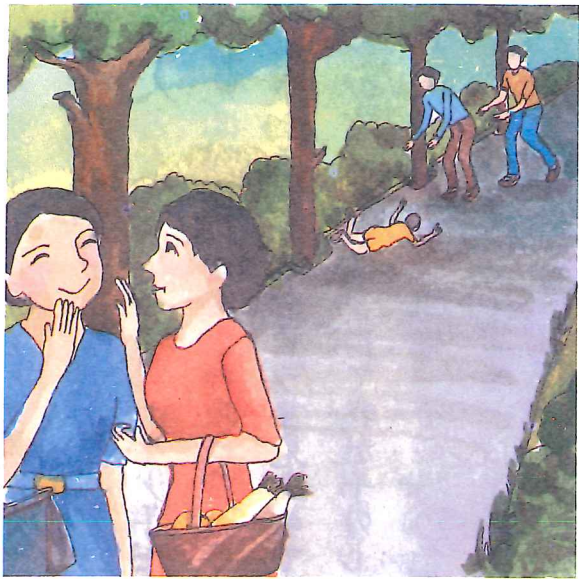
か。とたのみ、助けてもらったら、どうもすみません。と、素直に言える人間でありたいと思う。」と。

△話し合いのてびき▽

どうして、このからだの不自由な少年は、手だすけしようとしたこの人に対しても、冷たい、怒りの目でみたのでしょうか。はれものにもふれるような態度とは、どんなことでしょうか。そして、どうして、それが、一人の人間を傷つけることになるのでしょうか。

傷つける、ということの意味も考えてみましょう。障害者でない人が、ある日、突然、障害者になったとき、それまでその人が、障害者に対してとっていた態度や考え方によって、その人の生きる姿勢がさまってくる、とも言われますが、その意味を考えてみてください。

八 おどろきました



立ち話をしている母親のそばで、動きました。まわっていた二才ぐらいの男の子が、やがて退屈したのか、急に走り出しました。五メートルばかり走ったところで、バツとこけると同時に、大声で泣きだしたのです。

ちようど、むこうから歩いてきた二人の少年が、その幼児を抱きおこそうとしていました。

私は歩みよりながら、二人がかりでおこすのに、どうして手間どっているのかしら、と思いつつ、そばまできて、瞬間、胸を打たれました。

二人とも、手足の不自由な少年だったのです。

幼児は、からだをさわられている間に、泣き声をひそめ、そのままの姿勢で、顔だけ上げて二人をじつと見つめているのです。

その時には、泣き声で我が子のようすに気づいた母親がかけつけていました。かけつけてくる間に、その場の光景を見ているはずですし、私からも、この少年たちが、精一杯、だきおこそうとしていたことを伝えました。

でも、母親は、まるで、汚いものにさわられて迷惑だったかのような態度を露骨に示し、一言の礼もいわず、我が子を抱きかかえて叱りつけながら、最初の立話をしていたところまで引き返し、さらに、こちらを見て、何か言っているようすです。

おどろきました。

私は、当然、その母親が、少年たちにあたたかいお礼の言葉をかけるものと思っておりますのに、全く予想外の出来事に絶句してしまいました。

ようやく間をおいてから、

「よくやったわね、ありがとう。」

と、心からお礼の言葉をくり返し、去ってゆく後姿をじつと見送っていました。ベソをかいたような、あどけない少年の顔が、いまだに脳裏にやきついて、せつなくなってくるのです。そして、あの場で、適切な態度をとれなかった自分、はがゆくなるばかりです。

ハンディキャップを越えて、精一杯に示したその好意に対し、傷つけた母親の態度は許せないし、そんな母親のそばで成長してゆくあの子のことを考えるときやはり、あたたかい気持をもって、人間らしく生きるといふ教育が、一番

必要なように思います。

これは、今年の夏、私が通りがかりに体験したことです。

△話し合いのてびき▽

ころんだのを助けられたこの幼児の心の中に、めばえかけたかもしれない大切なものを、つぶしてしまった母親の態度を、どう思いますか。

なぜ、お礼のひとつも言わなかったのでしょうか。

このできごとを見ていたひとが、「そんな母親のそばで成長してゆくあの子のことを考えるとき」といつて心配しているのは、どういう意味でしょう。

親が、その子どもに対してとる、ふだんの態度が、いかにその子に大きな影響をあたえるか、このできごとをおして、いろいろと考えてみましょう。

九 ひろしのこと

「ごめん下さい。〇〇ミシンですけど、修理も承っております。奥さんいかがですか。」

つい、二、三日前のことだった。男性セールスマンが、パンフレットを差し出しながら、玄関に入ってきた。

その時、九月にしては残暑もきびしく、学校から帰ったばかりで、上半身はだかのひろしが、私のそばへのっそりと出てきた。ひろしの顔を見たその人は、説明もせず、

「では、また。」

と、そそくさと帰って行ってしまった。

ひろしの顔、そう、原因も、病名もわからず、生後一年を過ぎてから、骨の異状のため、頭の骨をけずる手術のほか、数回の手術をした。鼻のまわりの骨が固く大きくなり、鼻はペチャンコ、左歯ぐきの骨も大きく、口も開いたままとなった。

その上、視力も聴力も弱い。「コワイ」「オバケヤ」とよく言われる。

春、桜のころ、王子動物園はずいぶんの人出である。私たち親子四人は、よくお弁当を持って、王子陸上競技場の東側を上へと歩いて行く。川のそばには、小さな公園がいくつもある。

ひろしも弟と公園の遊具でよく遊ぶ。

その日も、小学校に入っているだろうか、まだ幼稚園かもしれないぐらいの子どもたち四、五人が遊んでいた。

ひろしが近づくと、じろっと見ながら、そろそろと後ずさりはじめた。

「このお兄ちゃん、病気でこんな顔になったんよ。」
少々ことばあらく、私は子どもたちに行った。
その瞬間、その中で一番背の高い女の子が、
「ゴメンナサイ。」

と頭を下げた。ドキッとした私だった。

いつも、どこでも、子どもたち、大人たちにじろじろ見られるだけの私たち親子だった。だから、「ゴメンナサイ」と言われて、めんくらってしまったのである。

その「ゴメンナサイ」のことばの、何と美しかったこと、尊かったこと。その女の子のお母さんて、どんな人？とふと思った。





ひろしがもつと小さいとき、私が友人とひろしと三人で散歩をしていたときのことである。途中、中年の女性二人とすれちがった。

「もう二、三歩、歩いてから、後をふりかえってごらん、むこうの二人も、きつとこちらをふりむいてるから。」

と、私は友人にいい、

「一、二の三。」

と、ふりむいた。



案の定、女性二人もこちらを見ていた。バツの悪そうなその顔を見て、

「いやあねえー。」

と、友人はいった。じろじろ見られることには馴れっこになったとはいえ、バスの中から、となりの人に何やら話しかけ、私たちの方を指さされたりすると、

本当にたまらなくなる。

私たち夫婦だけで外出する時、誰も、障害児の親だということにはわからない。

いっだったか、電車で、ダウン症の子どもと一緒にになったことがあった。

「うちにもいるんですよ。」

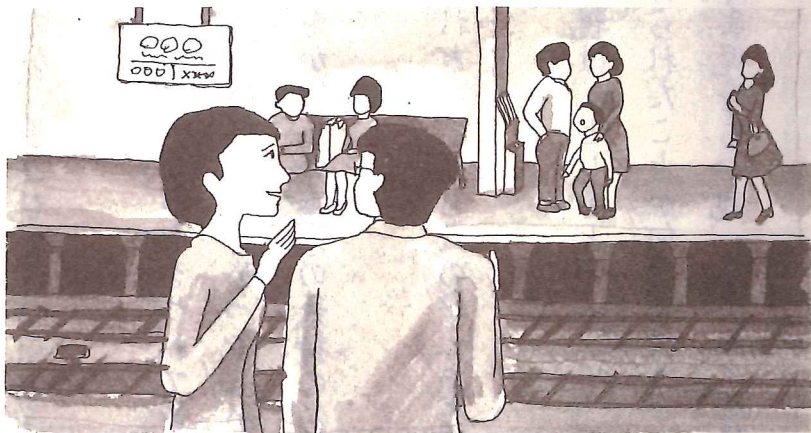
と、そのお母さんと話をすることができた。

けれど、ホームで電車を待っている時、向い側のホームに、障害児の母子がいたことがあった。

「どこが悪いのかしら。」

「どこかへ（施設か学校）行ってるんだらうか。」

と私たちは話し合っていたのだったが、そのお母



さんは、ものめずらしさで見られていると思われたのか、子どもをきつく抱き寄せられた。

私たちは、目のやり場に困ってしまった。その時、私は、ひろしをつれて歩いていて、じろじろ見られるのにも、ものめずらしさ、わが子でなかってよかったという見方と、もう一つ、「どうしたの？」と声をかけたい善意の気持のあることわかった。

かわいそうに、という同情はしてほしくない。けれど、「どうしたの？」「元気でがんばって。」と声をかけてほしい。

子どもは、どんどん大きくなっていく。そして、親は、としをとっていく。私たちも、見知らぬ人に声をかけられて勇気づけられたことが何度もある。

声をかけられるということが、どれだけ、私たち障害児をもつ親、兄弟の気持を明るくしてくれることか。

『年^{とし}離れた親が、障^{しょうがい}害^{がい}児^じを道^{みち}づれに心^{しん}中^{ちゆう}……』などと新^{しん}聞^{ぶん}記^き事^じに出^いない世^よの中^{ちゆう}にな^なってほ^ほしいと願^{ねが}うのである。

△話し合いのてびき▽

「ゴメンナサイ」といった女の子のことばを、ひろし君の親は、なぜ「美しい」と感じたのでしょうか。

また、「かわいそうにという同情はしてほしくない」と言っておられますが、同情でなくて、どのような心がまえを求めておられるのでしょうか。

「同情」と「共感」のちがいも考えてみましょう。

「子どもは、どんどん大きくなっていく。そして、親は、としをとっていく」と書いてありますが、どういうことを言いたかったのでしょうか。

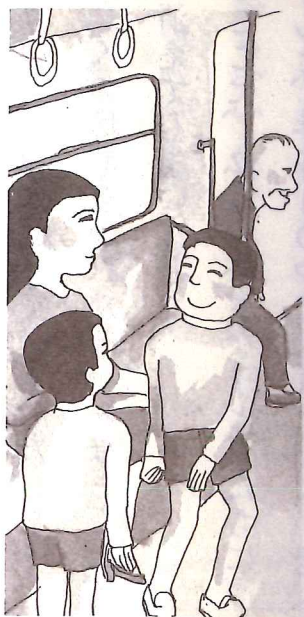
十 若いお母さんとおじいさん

あれは日曜日だったと思います。二年生位の坊やと、幼稚園位の坊やを両脇にすわらせた若いお母さんが、さも楽しげに、これから行く遊園地の話をしていました。

車窓からみる須磨の海は、やわらかい光を受けて、のどかなささやきをかわしているようでした。

電車は次の駅につき、幾人かの人に乗ってきました。若いお母さんは、小さな子どもたちに、こう言ったのです。

「さあ、あなたがたは元気な子どもでしょう。おじいさんに席をゆずってあげましょう。」



それを聞きおわらないうちに、子どもたちは腰をあげて、母のまなざしをま

ぶしくみながら、

「はい。」

そして、若いお母さんは、

「どうぞ、おかけください。」

と言ったのです。するとどうでしょう

う、いきなり頭の上から、大きな声でどなるではありませんか。

「わしは、年寄りじゃあないんや。まだまだ、若い者には負けん。」と。

電車の中の静けさは、急にどこかへ、ふっ飛んでしまい、そこには見苦しい空気がただよっていました。

若いお母さんは、受けかえす返事すらでないで、ほほを赤らめながら、そば

で見守る子どもたちに、それでも、こわばった笑みを作りながら、

「おじいちゃんは、とてもお元気なそうよ。」

と、両脇へ子どもをひき寄せて、頭をなでていました。

年寄りには、さも元気だと見せんばかりに、吊りかわも持たずに、電車の真中に仁王だちに立ち、何かぶつぶつ言っていました。

へんな、へんな空気が、小さな窓からぬけて、どこかの草むらにかくれてしまりのを、私は願っていました。

二人の坊やをつれた若いお母さんは、遊園地のある駅で降りて、ホームの中に消えてしまいました。

ここに、私は、小さな子どもたちに、小さな親切を、自然に教える若いお母さんと、年寄りの中に入りたくない老人の、心のすれちがいを見たのです。

若いお母さんのとられた態度は、子どもたちの心に傷をつけることなく、そ

して老人にも優しさを贈ったことでしよう。

それにしても、あの時、老人は小さな親切を心からつけ、その上で、元氣だからいいんだと、返すことができなかつたのでしようか。

福祉の心は、あたえたり、もらったりするものではなく、なにげない思いやりの心だと私は思います。

△話し合いのてびき▽

この若いお母さんは、りっぱな勇氣のある人だと思いませんか。

電車やバスにのったとき、たまには、この文の中のおじいさんのような人もいるかもしれないけど、そんなことは気にしないで、ど

んどん席は、ゆずった方がいいのかもしれないね。

あなたが、としをとって、おじいさんやおばあさんになったとき、とても元氣だったとして、席をゆずられた場合、そんなとき、どうしますか。

十一 やっぱり勇氣がいる

木曜日のある日、野田阪神から地下鉄に乗ったときのことです。朝の九時すぎだったので、電車はあまりこんではいませんでした。

私は、一両目の一番前のドアのすぐそばに、すわっていました。本を見ていましたので、気づくのが遅れたのですが、目を上げると、若い女の人が、つえのような、何かスポーツにでも使うような棒を持って、立っておられました。

なんだかハツとして、その棒をよくみると、下の方が白いのです。

もしかしたら、盲人の方のつえかもしれないと思いましたが、お顔つきだけでは、ちよつと判断しかねました。

席をかわってあげなければ、と思いましたが、そのつえは、私の知っている盲人のつえとはずいぶんちがっています。とても長くて、スマートで、お年寄りの使われるようなもので白いものだけとはちがっています。

もし、ちがっていければ失礼だし、どうしようかと迷ってしまいました。

次の駅につき、ドアが開くと、運転室から、運転手さんがサッと出てこれれその女の人の手をとり、私のななめ向い側の席に

「ここがあいてますよ。」

とすわらせてあげ、また、運転室にもどって行かれました。

その次の駅で、女の人が立ち上がり、ドアの方に歩もうとすると、中年の女の人が、後からソツと手をかし、おりるのを手伝ってあげ、無事、目的地に着かれたようでした。

用事をすませたのち、帰りの近鉄電車の中でも、同じような光景にあい、い

ろいろと考えさせられました。

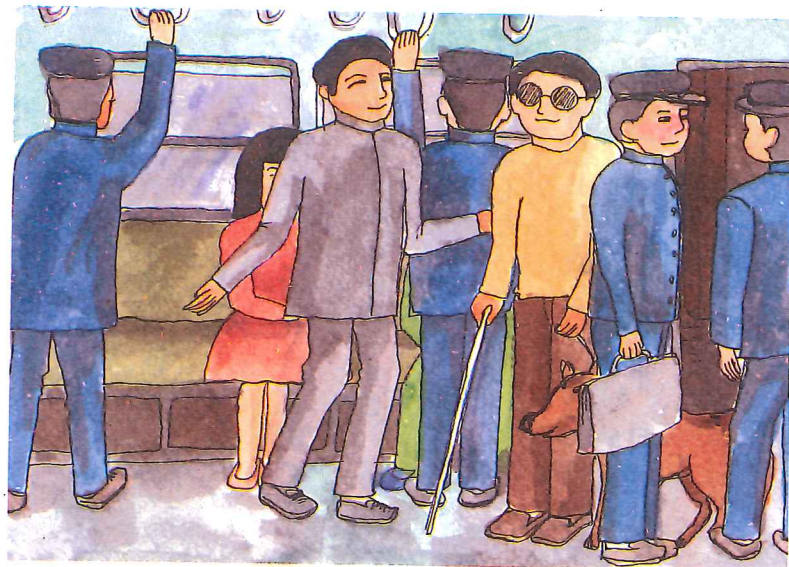
それは、ある駅から盲導犬をつれた青年が、乗って来られた時のことです。

電車は、下校時の高校生で満員でした。まもなく、少しはなれたところにすわっておられた牧師さんらしい方が気づかれ、その青年に近より、

「どこまで行かれますか、ここにおすわりなさい。」

と声をかけ、席をゆずられました。

まわりの人々は、ホッとしたような雰囲気になりました。



私は、盲導犬を近くで見たのは、はじめてでしたが、静かで利口そうな犬でした。やはり、訓練を受けた犬だな、と感じました。

日頃、ハンディキャップを持った人々のお役に少しでもたてばと考えている私ですが、実行に移すことは、なかなか勇気がいることだと、今さらのように感じた一日でした。

△話し合いのてびき▽

つねにもいろいろありますね。

でも、どんなつえでも、ふつうは、体のどこかが弱い人が使うものです。つえを持っている人を見たら、自分なら、どんなお手伝いができるか、考えてみましょう。

でも、考えているだけだと、この作文のおばさんのように、気がおくれがしてしまうことが多いので、さっと、できるように、心の準備をしておきましょうね。

十二 うわべだけ美しくても

つい先日、朝八時過ぎの普通電車で、目の不自由な御夫婦を、阪急梅田までお送りさせていただくことになった。

塚口で乗りかえた車内の端の座席は、中年の男の方と、出勤とは思えぬ娘さん、その隣は、朝から舟をこいでおられる中年の奥さん、の三人がけであった。私達が車内に足をふみ入れ、誰にともなく、

「恐れ入りますが……。」

と声をかけると、さっと、男の方が立ち上って下さって、私達がお礼を述べ合
い、まず、奥さんが腰をおろされた。

私はその時、真ん中の娘さんも、当然、席を立て下さるものと思ったのに、

立ち上る気配もない。

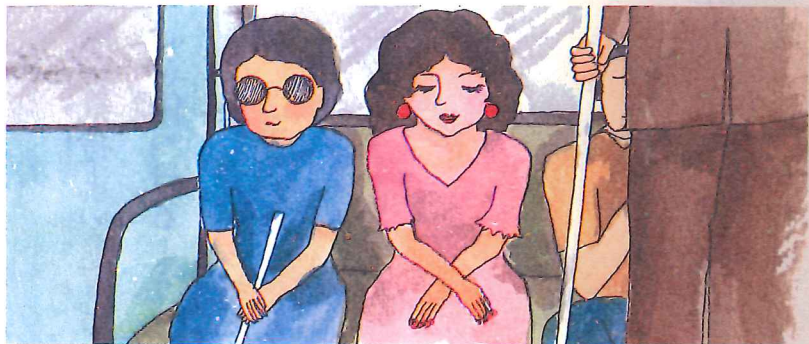
「私はよろしいから。」

との、御主人の言葉や、御夫婦と私の言葉のやりとり
に、何分かの時が流れ、もう一人、坐られる方がおら
れることは、わかつているはずなのに、平然と坐って
いる娘さん。

白いブラウスの衿を覗かせた、赤いカーディガン、
ゆるやかなウエーブのセットされた髪、美しい化粧、
金色に光るイヤリング、赤く染められた爪、そして、
赤い靴のこの娘さんは、つましく目を伏せていた。

急行ほどではないが、かなりの人であった。

私は重ねて、この娘さんに声をかけようと思ったが



「坐ろうと思うのが、まちがいですよ。」

と、いつか御主人からお聞きしたことが胸に浮かび、この際、気持よい態度で立って下さればよいが、そうでない時は、さらに御主人の心を傷つけるような気がして、穏やかならぬ心でいるうち、駅が二つ過ぎ、はしに坐っていられた奥さんが下車された。

この時、その娘さんは、自分のいた真ん中の席から、奥さんの去った空席へとにじり移った。真ん中が空いたわけで、盲人の御夫婦が、これで並んで坐られることになった。これによっても、この娘さんは、はじめから、この夫婦が、二人づれの方であることは意識していたのである。

私は、

「お嬢さん、うわべだけ美しく装わずに、どうぞ、貴女の心も、美しくされることを心がけて下さい。」

と、心の中で叫んだ。

この娘さんは、ついに、梅田まで、顔を上げなかった。沢山の人の中で、娘さんに恥をかけさせたくないという思いも、私にあったけれど、今後、このようなときに、車内全体に、きこえるほどの大きな声で、私自身が呼びかける様にしなくてはと、深く反省させられたしだいである。

しかし、こんな場面ばかりではない。

目の不自由な方が、階段を降りられるときに、
「大丈夫ですか。」

と、声をかけて下さったり、手を貸して下さる方もおられるのは、とてもうれしいことである。



氣のついた方が、みんな、善意で接して下さったら、もっともつと世の中が、美しくなるのにと、ハンディを負いながらも、いつも明るく努力され、前進される方々に、胸うたれ、教えられることが多い。

小さな自分の心を恥かしく思いつつ、明るい社会を念じている。

△話し合いのてびき▽

よくある話ですね。

この「美しい」娘さんは、しんどかったのかもかもしれませんね。あなたも、非常にしんどいとき、そばに弱い人がいても、席をゆずらなかつたことはありませんでしたか。でも、自分が、しんどいときは、弱い人は、もっとしんどい思いをしていると考えると、やはり、席をゆずるべきではないでしょうか。顔や姿の美しさと、心のうつくしさとは、どのようにちがうでしょうか。

十三 バトンタッチ

福祉とは、誰からも強いられず、その人の心の底からほとぼしる善意のあらわれであるのではないのでしょうか。

一例をあげますと、

私はヘルパーとして、一週間に一回、アパートに住んでおられる身体障害者のKさんの家を訪問しています。

いつも、だいたい一週間分の食料品と、日用品などをメモして、スーパーの売出しの日に、二軒、あるいは三軒まわって、自家用車に積んで買い求めてきます。

私が訪れていますと、時々、かわいい若い奥さんが、

「おばさん、今日は買物ありませんか。」



とたずねて来られるので、Kさんに聞きますと、「二階を借りておられる方で、たいへん親切な方ですの。前におられた若い奥さんが、夏は暑いので、毎日ドアを開けて下さったり、買物があつたらついでに買って下さったり、電話の用事をして下さったり、たいへん助かっていましたら、また、あとへ来られた方が、同じように親切にして下さるので、私は、本当に、めぐまられたものです。身体が不自由でも、こうして親切な方の中に生活できて、喜んでいきます。」と、おっしゃっておいりました。

先に借りておられたMさんが、家を新築して出られ、後から入ってこられた方に、下のおばさんは身体が不自由なので、めんどろみてあげて下さいね、と言ひ伝えて下さつたら幸いです、と喜んで話されました。

バトンタッチの伝言を聞いても、その人に心がなければ、できないことです。一回や二回は、誰でもできることです。「言うは易し、行ふは難し。」とか、長く続けるといふ事は、なかなかたいへんなことです。

Mさんのことは、よくKさんから聞いておりましたが、年の若い人は、割合わりあひに関心のうすいもの、と思つておいりましたのに、この話を聞いて、私は胸をうたれました。

見も知らぬ他人同志の、肉親以上の美しい心のつながりこそ、福祉の心ではないでしようか。

善意を受ける方も、本当に、心からありがたく感謝して、その心が相手の心

にふれ、お互いに心と心が相通じ合ってこそ、福祉が成立って行くものだと思
じます。

△話し合いのてびき▽

「心の底からほとばしる善意」とは、どんな例があるでしょう。
あなた自身の経験や、まわりの人の例から考えてみましょう。

「バトンタッチの伝言を聞いても、その人に心がなければ、でき
ないことです」と書いてありましたが、その「心」とは、どうい
うものでしょう。

心と心が通じあった経験を、あなたは持っていますか。

十四 点訳をはじめて

一年前、県の点字図書館の点字
講習を受講してから、グループの
皆さん方と共に活動しております。

点字講習の申込みをすることを、
主人が許してくれました時のよろ
こびは忘れられません。他の御婦
人ならば、ミンクのコートか、ダ
イヤでも買ってもらったように、
「パパ、ありがとう、私の若いと



きからの念願をかなえて下さってうれしい！」と言ってる私は、涙がポロポロこぼれて……。

ところが、講習の途中で、私自身が坐折しかけたことがあります。マスアケ（句読点に当る）が理解できません。頭が悪いのか、年令的に、五十三才では無理なのか、月曜日の点字講習の日には、劣等感のかたまりになり帰宅しておりました。

そのたびに、主人が、

「一回の講習でわからないなら二回受ける。」

「六ヶ月で、何もかもわかつとあせるな。」

「自分だけが、わかっていないと思うから、やめたくなる。皆、同じように感じているんだ。坐折するか、マスターするかで、お前の今後の生き方が変わる。」などと、はげまされました。

家族の理解とはげましにより、点訳を続けさせていたのですが、なさけないことには、友人（昔のクラスメートたち）が、ボランティアを理解しにくれません。

「他人さんのお世話ができて、結構なこと。お宅は金持やものね。」

「いらんことをはじめて、また、忙しい忙しいというんでしよう。」

「他人のことしてる間なんてないわ、忙しいのに。」

なんと悲しい言葉でしようか。

自分のためには、茶花道をはじめ、料理、手芸とおけいこごとで多忙、その間に、海外旅行まで入る彼女たち。そして、日々が、退屈でグチッぽい友人。それに比べ、私は、毎日が楽しく、朝早くから、あれこれ一日中が生きがいです。

点訳に時間をつくるには、やはり計画した生活が必要で、毎日毎日、生きて



ることのありがたさを感じ、楽しいことです。

肩もこりませんので、不思議がられますが、自分が、心から喜んで、させて
いただいている、と思うと、肩もこりません。

ボランティア活動に参加される方は、『他人様のためにしてあげてる』では続
きませんので、『自分の心の栄養として、させていたただいている』そう思って、
ボランティア活動を行えば、人生はバラ色です。

昔の友人たちとの間かくが、だんだんに広く遠くなり、今は、同じ考えて集
まった方々と、楽しい点訳グループをつくり、盲人の方々の行事のおてつだいに

も出かけております。

健康な私たちが、障害者のおてつだいをするのは、あたりまえのこと。

ボランティア、たいそうに考えなくとも、いつでも、どこでも、だれでも、
人間としての愛と情熱があれば実行できると思うのですが……。

△話合いのてびき▽

この奥さんが、点字講習を途中でやめていたら、どういう生活にな
っていたでしょう。

また、この奥さんと、昔の友だちとの間が、どんどんはなれてい
っているのはどうしてでしょうか。どこが、くいちがっているの
でしょう。

そして、この奥さんは、そのことを別に、苦にしてはいませんね。
どうしてでしょうか。

「心の栄養にする」ということはどんなことでしょう。

十五 姑とわたし

「さあ、おばあちゃん、ごはんにしなさいよ。
ボツボツおいでよ。」

という声に、姑のうれしそうな顔。

食べ盛りの子どもに作った料理をほしがる姑
夕食もやっとなんで、ボツボツ洗い物にかか
ろうと立ち上り、食器に手をつけようとすると、
姑は、

「おかあさん(私のこと)、早うご飯にしてー。
と、たった今、食べたばかりなのに、もう忘れ

てご飯をほしがる。

下の世話も、たいへんなものだった。姑は、

「おかあさん、だれかウンコをしているよ。」

と、呼びにくる。私は、

「おばあちゃんやろー、またウンコしたの。」

と思わず叱りつける。

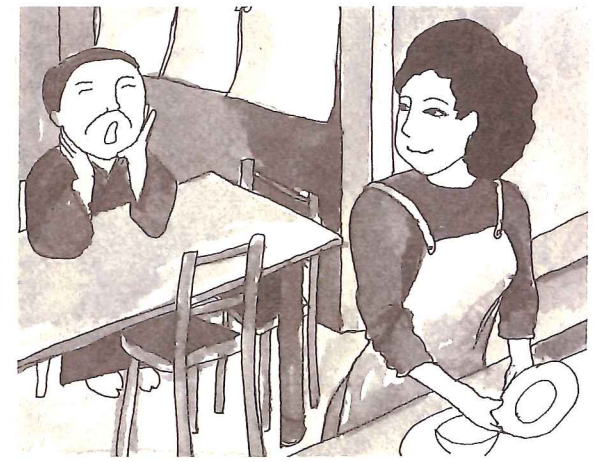
有吉佐和子作「恍惚の人」という小説を、そ

のまま芝居にしているような私の生活は、姑が、

この世を去るまでの二十年続いたのである。

姑は、脳軟化症であった。

ある日、突然に姑をおそった病魔は、口もき
けなく、手も足も、人形のようにブランブラン



にしてしまった。

福祉の援助が何一つない時代のことゆえ、私は、気の毒な姑のことより、自分の人生は、自由も楽しみもなくなった、これでおしまいになった、姑の世話で一生終らなくてはならない、と一日中泣いて泣き明かした。

出る涙もなくなったとき、ふと、頭をかすめるものがあつた。

「姑にはたいへん気の毒なことであるが、これが、もし私の子どもだつたらどうしよう。それこそ、私の人生は暗やみであつたらう。まあ、姑であつてよかつた。年の順でもあるし……。」

と思つた時、私は、この病が、何年、何十年かかろうと、姑を大切に、十分に心をこめて世話をしあげよう、福祉の援助はなくとも、私達の家族の一員だもの、姑の世話をすることを承知で、嫁いできた嫁だもの、と、二十年間の世話を始めたのであつた。

その間には、私も疲れ、病氣にもなつた。精神的にも疲れが出たこともあつた。だが、私は、いっしょうけんめい世話をした。

しだいに、愛情もできて、子どものように思うようになり、深い深い人間関係が生れてきた。ある日、小姑が、

「姉さんばかりに世話をさせて、すみません。たとえ一ヶ月でも連れて帰りましょうか。」

と言つた時、私は、姑を他の家にわたすのは、子どもをとられるような気持ちになつた。

姑も、

「おかあさんのところがよい。」

と、はなれなかつた。

姑は、だれも忘れてしまつたが、私だけはよくわかつた。

長い間の看病で、私はいろいろなことを体験した。
そのなかの一つ、老人ぼけは、家族の愛情で、ある程度は治るものである。
この愛情を養う心こそ、福祉の心ではないかと思つた。

△話し合いのてびき▽

このお嫁さんが、二十年間も体の不自由な姑さんのめんどうをみる
ことができた理由は、なんだったのでしょうか。

「どしの順でもあるし」という意味は、どういうことでしょうか。

「口もきけなく、手も足も、人形のようにブランブラン」のおとし
よりも、それでもなお、生きてゆく意味を考えてみましょう。

十六 里子

「おばちゃん、田舎のお正月、本当にいいね、このお餅、おいしいよ。」

「そう、そんなにおいしい。」

「うん、今まで、こうして、家中皆そろって食べたことないから。」

このような会話が あつたのは、数年前の正月、ある市内にある、親のない施設の子を、私の家で里子として、十日間ほどみたときのこと、当時、中学三年の



かわいい女の子でした。

施設の建物も古く、すき間風が入る部屋で、暖房の設備もなく、猫の子のごとく丸くなつて寝ていることや、朝の掃除も、冷い水で雑布がけをしていることなどを話してくれました。

その手も、しもやけになっていました。

かわいそうに、と思つて別れてから、早や一年八ヶ月、今年の八月十三日からの盆休みに、私の家へ帰つてきて、楽しく一夜を過ごし、翌日の夕方、大阪へ帰つていきました。

その時に、私の心づくしの弁当とおみやげを手渡すと、

「このお弁当こそ、おばちゃんの愛情がこもっているわ。」

と喜んで、袋に入れる。その姿に、人と人との心のつながりが、いかに大切に
あるかを教えられたような気がしました。

この子は、中学を卒業すると、将来、看護婦になりたいという一念から、尼崎市内の病院へ就職したのでした。

頼る人、相談する人とてなく、たった一人で、がんばりました。

「おばちゃん、がんばっているの、元氣よ。」
と、たびたびの電話連絡を唯一の楽しみにしていました。

私も、そのたびに、はげましと、

「困ったことがあったら、必ず知らせるのよ。」
と、言いきかせていました。

ところがある日、



「おばちゃん、このごろ、私の寮の管理の男の人が、色目で私に近づいてくるの。私一人でしよう、困っているの。」
との電話があったのです。

心配していたことが、現実の問題として起きてきたと、驚きと不安に、私も悩みました。

二、三日おきに、同じような電話ではありませんか。

「施設の先生に、事情を打明けて相談してみたら。」
と言つと、

「おばちゃん、一度出たら、そんな面倒なんかみてくれないわ。」

「そう、困ったね。今一番大切な時期よ、だからしっかりしているのよ、おばちゃんかなんとか考えてあげるから。」

と、重い気持ちで、受話器を置きました。

自分の子だったら、と思うと、放っておくわけにはいきません。

夫と相談して、病院を辞めて、私の家へくるように、就職に関しては、知人を通じさがしてあげようと、さっそくその処置をとったのでした。

さいわいにも、郡内から、大阪で病院につとめている親切な女の人に出会い、その病院に、就職することになり、一応、安堵の胸を撫でおろしたのです。

なお、うれしいことには、念願どおり、この四月から、大阪市の准看護学校に入学し、働きながら、勉強にはげむことができるようになり、毎日、明るく、楽しくくらしている今日このごろです。

「おばちゃん、これ成績表よ、見て。」

と、封筒よりとりだした表を見ますと、欠席もなく、専門学科も良い成績で、

「えらいよ、がんばっているね、

この調子で、二年間、がんばるのよ。」

「はい。」

二人は顔を見合わせて、にっこり。

心の中は、この子が、順調に成長してくれますようにと、神にも祈る気持で一杯です。

△話し合いのてびき▽

自分の子どもでもないのに、ひとりの女の子の身の上を、親のようにならなうって考えたり、手助けしたりすることができるのはなぜでしょう。

人と人との心のつながりは、なにがもとになって、できてゆくのでしょうか。

施設のすべてが、この作文のようなどころではもちろんありません。すばらしい施設も、たくさんあることを理解しましょう。

十七 ゴミひろい

「おじいちゃん、ふくしって何のことや?」

小学校二年の孫が、思いついたように私にたずねた。

八月一日よりはじまった早起き登山の記録票に印をもらうため、せつせと早朝から私と一緒に起きだして、私のあとにつづいて、高座の滝まで、往復する。一時間あまりの道のりである。

私は、火挟みとビニール袋を持って、路上はもちろん、左右の雑草の中からでも、菓子や煙草のつつみ紙、ちり紙類、空かんなど、目にはいったゴミ類は、片端から拾いあげて歩く。

途中には、ところどころに、ゴミをすてないよう、山火事をださないよう、

いろいろとていねいに注意書が掲示されてあ
つても、それとは裏はらに、雑多なゴミは後
を断たない。特に、月曜日の朝、休日あけの
日は、その汚れ方もひどい。

だいぶ歩いた後に、私は返事をした。

「みんなが幸せであることだ。」

「ふ〜ん。」

孫は、しばらく考えこんでいたが、

「そしたら、うちのミケにも福祉あるの?」

「そりやあるさ。毎日、おいしいさかなもら
つて喰つてるじゃないか。」

「そうだね……そしたら僕のうちは?」

「そりやおまえ、みんなしあわせにくらしているだろう。福祉一杯の家だよ。」

「そうか、そしたら和ちゃんとは?」

和ちゃんは、同級の仲よしだが、若い父親が昨年急病死し、そのため、母親
が父親のつとめていた先に就職して、かろうじて家計を保っている母子家庭で
ある。

「うん、福祉一杯とは言えんな。」

あの子のお父さんはいないし、お母さんひとりで、お父さんの分まで働いと
られるんだからな。」

「お父さんがいないから、かわいそうやね。それでも和ちゃん、元気いいよ。」

「うん、淋しくても我慢しとるんだよ。和ちゃんもえらいが、お母さんがえら
い人だからな。」

それにしても、女だから男の人の働く程はお金くれないからな、そのたらな



いところを国が、なんぼか助けてあげてるんだ。」

「ふくん、そんなこと知らなかった。そうしてもらおうと助かるね。」

「それが福祉だよ。そうしてみんながしあわせに暮すことができるんだ。」

和ちゃんそこ以外でも、ふしあわせのうちはいろいろとあるからな。たったひとりて淋しく暮しとられるおじいさん、おばあさんのお宅へは、洗たくや、掃除に行つて、手伝つてあげるきまつた人があるし、お金がなくて困つてる人には、国からお金がでて食べていけるようにしてある。

ほかに、いろいろ困つた事情のある人でも、国が相談にのつてくれるように定められている。みんなこれ福祉だよ。」

孫は黙りこんだまま、私の後について滝まで登りきると、いつものように印をおしてもらい、山を降りて行く。

私は、ビニール袋に入ったゴミの始末をして、孫のあとに続いた。



赤い太陽が、だいぶ顔をのぞかせてきたが、山あいからの涼風は、汗ばんだ顔や肌を、ここちよくなせあげながら通りすぎて行く。

「おじいちゃんは、毎朝、ゴミを拾つて歩くのも、福祉のお手伝いを少しでもしていると信じてやっとなるんだ。」

「へえ？ おじいちゃん、ゴミ拾ってるだけやで。」

「そうだ、そのとおりだ。」

「それがなんて福祉のお手伝いやの？」

「ボランティアって、聞いたことないか？」

「何か聞いたことあるみたいや。」

「それはな、ボランティア活動と言つてな、人のためになることをしているわけだ。ゴミ拾うのも、ゴミだらけの道を歩くより、ゴミのないきれいな道を歩く方が、誰でも気持良いだろ。」

人に少しでも良い気持をもってもらおう。そして、楽しく山へ登ってもらおう。

登山したあとも、楽しい気持になつてもらおう。これで福祉のお手伝いだよ。」

「おじいちゃん、ちよつと善いことしてるんやね。」

「ちよつとじゃないよ。」

孫にほめられるなんて面映ゆい心地だが、老人なりに自分に応じた、わずかな行為で、社会に報いる手だてがあるならば、何でもやらねばならないと心がけている。わずかな余生だから。

△話し合いのてびき▽

あなたにとって福祉とはなんでしよう。

あなたのまわりに、福祉を必要とする人がいるかどうか考えてみ

ましよう。

ごみをひろっているだけでも、福祉につながっていると、このお

としよりは考えていますが、どうつながっているのでしょうか。

観光地や公園のゴミの山をみて、あなたはどんなことを感じますか。

おわりに——この本のつかい方など

この本は、家庭において、親と子が読み合って、話しあいながら、「福祉」についての理解を深めるためにつくられたものです。

「福祉」についての理解を深める、という場合、福祉制度や福祉の法律について、くわしく、正確に知った、というだけでは、理解を深めたことにはならないと思います。

いろいろな福祉の制度や法律を生みだすもとなる「福祉の理念」、いいかえれば、「福祉のこころ」というものがなかったら、つめたい、うわべだけの人間社会になることでしよう。

知識としての福祉は、学校や、本などでいつでも学べるのです。

問題は、社会における福祉を前進させるために、市民一人ひとりの、生きる姿勢のなかに、「福祉の理念」が、どれだけ身につけられてゆくかにかかっているのではないでしようか。

そうした理念は、単に、「おとしよりを大切にしよう。」とか、「障害者に愛の手を。」といった、かけ声だけをかけ合っても身につくものではありません。

困っている人や、苦しんでいる人を眼の前にして、思わず手をさしのべたり、声をかけたり、一緒に考えたり、行動を共にしたりするなどの行為は、理屈や知識だけで、その人の生き方として、簡単に、身につくようなものではないと思います。

「福祉」を理解するということは、言い換えれば、井戸に落ちそうになっている幼児を見て、思わず走り出すという、人間として当然の姿勢を身につけるとから始まるのではないでしようか。

家庭における「福祉教育」のねらいは、このような、「知識」以前の「生き方」(それをここでは「福祉の心」と名付けてみました)に大きな意味があると思われます。

こうした「福祉の心」は、一挙にある日身につくものではありません。小さいときからの育てられ方、生きる環境によって、積みあげられていくものでしょう。

もちろん、親自身の「生きる姿勢」や「生きる目的」が、問われてくるのも当然です。

このテキストは、そうした「生き方」「生きる姿勢」を、小さな例話をおして、親と子でふりかえってみる、話合ってみる、というところにねらいがおかれていますので、読み合ったあとの話合いや、話合いのなかから、なにかを感じたり、つかんだりすることが大切になります。

どんなことを話合うのか、学びとるのは、ここに書かれた作品の書き手の「福祉」の受けとめ方が十人十様であるように、読む側の受けとめ方も、さまざまだと思います。

ですから、この本の、特別の使い方というものは、ほんとうは、ないといえます。けれども、親と子で話合うときに、全然、とっかかりがないのも困るでしょうから、一応のヒントは、それぞれの話のうしろに書いてみました。しかし、それは、あくまで参考にすぎませんので、こだわらなくてもよいわけです。要は、あなたが、このテキストの、ねうちをつくりだしてゆく主人公なのです。

なお、この本の作品は、広く公募したもののなかから選り出したものと、これまで発表された文集や、本から選んだものが含まれています。

選出にあたっては、京都精華短期大学教授の野上芳彦先生と、誕生日が
とう運動本部の藤本隆先生に御協力をおねがいました。両先生および、
作文をお寄せ下さった多くの皆様方に深くお礼を申し上げます。

ふくしのころ

定価 300円(〒120円)

昭和53年2月10日 第一版発行
昭和53年4月5日 第二版発行
昭和53年10月1日 第三版発行
昭和54年3月31日 第四版発行
昭和54年12月1日 第五版発行

発行所 社会福祉人 兵庫県社会福祉協議会
法 神戸市葺合区坂口通2-1-18
兵庫県福祉センター内
電話 078-242-4633~7

編集 さわだきよかた
イラスト コスモス/森鈴子
印刷 中田印刷出版社
〒655 神戸市垂水区中道4丁目1の26
電話 078-751-5004

作者氏名一覧

項	題名	作者名	備考
一	勇君にまけたらはずかしい	佐々木 理衣	日本肢体不自由児協会第18回「友情の作文」より
二	家庭奉仕員となつて	田 畑 多喜子	兵庫県家庭奉仕員連絡協議会「わたしはヘルパー」より
三	いやなこと	やましろまさのり	兵庫障害者連絡協議会「杖」第一号より
四	オメデタイオメデタイ人間	福 井 達 雨	柏樹社「生命をかつぐつて重いなあ」より
五	がんばっているのに	岩 国 久美子	伊丹文芸研究会詩集「がんばっているのに」より
六	このごろ思うこと	森 水 忍	友生養護学校「弁論大会原稿集」より
七	あるできごと	水 船 幸 代	応募作品
八	おどろきました	横 谷 純 子	応募作品
九	ひろしのこと	安 国 寿 子	応募作品
十	若いお母さんとおじいさん	吉 田 有 公 子	応募作品
十一	やっぱり勇気がいる	岸 本 節 子	応募作品
十二	うわべだけ美しくても	妹 尾 智 津 子	応募作品
十三	パトントッチ	志 水 敏 子	応募作品
十四	点訳をはじめて	柴 田 美 奈 子	応募作品
十五	姑とわたし	来 住 薦 子	応募作品
十六	里子	横 内 き み 子	応募作品
十七	ゴミひろい	西 田 文 雄	応募作品